

留学生を案内する日本の本当の名所とその歴史 第2回

<京都編>

さて外国人が最も「日本らしさ」を感じる町はどこでしょう。これは「京都」であるということが出来ます。京都は西暦794年、日本の元号で延暦13年に桓武天皇がこの地を都に定めたときから、明治維新で明治天皇が東遷する1869年、明治2年まで、天皇が常にその町にいる日本の中心であったのです。約1100年間、同じ場所に都があり、また貴族に雅な文化を象徴するように、紅葉の美しさや、武家の文化を代表するような二条城などの城郭、そして仏教の文化を象徴するように、さまざまな寺社仏閣が存在します。特に京都を守護するように建立されている比叡山延暦寺、そして京都の真ん中に立っている東西の本願寺などは有名です。

この京都に留学生を案内するとしたらどうするでしょうか。清水寺や京都タワー、妙法院の三十三間堂などはかなり有名ですが、逆に有名だけに、ほかの人とも行きますし一般の観光でも行くことができます。嵐山等もそうですね。せっかく学校で「日本の文化」を教えながら行くとなれば、それなりに「有名であるよりは歴史的に意味のあるところ」を案内する方が良いのかもしれない。

そこで、今回は私がおすすめする「文化的な京都」をお知らせしたいと思います。今回は、京都が観光地であるということから、少々マニアックな場所をお届けしたいと思います。

1. 京都府福知山市 皇大神宮・元伊勢外宮

さて、いきなり京都市からはみ出してしまった感じがありますが、そもそも「京都」あるいは「平安京」という土地がなぜ「都」なのかということを考えましょう。そもそも、日本にとって「都」とは、大和朝廷の天皇が御座する「御所」があるところですよ。天皇がいるということは、現在は違いますが、少なくとも戦前までは「日本の政治の中心」ということを意味します。そして、日本の場合は「政治」だけでなく「文化」も「技術」も全ての最先端が「京都」に集中していたということが言えるのではないのでしょうか。江戸時代、それも「町人文化の隆盛」といわれる元禄になって、やっと江戸の文化の方が京都よりも進んでいるかあるいは独自の文化を形成したといわれますが、それまでは全ての中心が京都であったといっても全く問題がないのです。

しかし、そもそも「天皇がいる」ということは「天皇の祖先」もその近辺にいるということの意味します。しかし、平安京の中には、実は大規模な神社はありません。元々、桓武天皇が平城京から遷都することを企画するのは、平城京の都の中である「外宮」に東大寺や春日大社など、さまざまな寺院を作ってしまう、そのために宗教家が政治に関与してきたのを嫌ったためであるといわれています。弓削道鏡が天皇になろうとして宇佐八幡宮の神託を捏造したのも、そのような中の一つの事件といわれています。

桓武天皇は、そのような宗教家の政治への関与を嫌い、平安京の中に寺院や神社を多く入れることを望みませんでした。現在京都の周辺の山の中に有名な寺院があるのはそのような事情からです。もちろん、そののち、千年の間にさまざまあって、平安京の中に本願寺やあるいは織田信長が横死した本能寺などもあ

りますが、それらは、桓武天皇の時代に企画されたものではなかったのです。

さて、そこで天皇は、その天皇の祖先である「天照大御神」を祀る神社の場所を作ることとなります。そこで、「社伝」によると「人皇第十代崇神天皇三十九年（紀元前五十九年）に『別に大宮地を求めて鎮め奉れ』との皇大神の御教えに従い、永遠にお祀りする聖地を求め、皇女豊鋤入姫命御杖代（とよすきいりひめのみことみつえしろ）となり給い、それまで奉斎されていた倭の笠縫邑を出御された」とありその後「そして、まず最初にはるばると丹波（のちに分国、当地方は丹後となる）へ御遷幸になり、その由緒により当社が創建されたと伝えられている」[社伝より原文ママ抜粋]まさに、この神社は豊鋤入姫が天照大神の神教により神器・八咫鏡を奉じて倭国笠縫邑を発し但波国吉佐宮に還幸した、その但波国吉佐宮の跡地に、この神社があるとされているのです。

なお、社伝によると「皇大神は四年ののち倭へおかえりになり、諸所（二十余か所）を経て、五十四年後の人皇第十一代垂仁天皇二十六年に、伊勢の五十鈴川上（いまの伊勢神宮）に永遠に御鎮座になった」[原文ママ]とあります。要するに、現在の伊勢神宮ができる前に、ここに皇大神がいらっしゃり、そして、ここで過ごされ日本の国づくりをされていたということになるのです。伊勢神宮よりも前に、この地に御座されたということから「伊勢神宮よりも前の社」要するに「元伊勢」といわれるようになっていきます。

参道には、用明天皇の第三皇子・麻呂子親王が鬼退治の際に戦勝を祈願して御手植えになったとされる杉が聳え立っており、また、本殿の周囲には、多数の社殿が囲んで祀られているのです。伊勢神宮よりも少々小ぶりではありますが十分に由緒を感じる場所であることは間違いがありません。

また、伊勢神宮同様に外宮もあります。外宮は「元伊勢外宮豊受大神社」といい、「豊受大神」をご祭神として祀られている神社です。

やはり社伝由緒書によると「大神は人類生存上一日も欠くことの出来ない衣食住の三大元を始め広く産業の守護神であり、国民に篤い御加護を垂れさせ給ふ大神に座します。皇祖天照大御神は天孫降臨以来皇居に奉斎されていましたが、人皇第十代崇神天皇の代に至りまして天皇のお住まいと同じ皇居にお祭りしているのは誠に畏れ多いと思召され、即位六年に倭国笠縫邑に御遷座になりまして、皇女豊鋤入姫命が祭事を掌っていられました。この地に三十三年間御鎮座になりましたが、別に大宮地を求めて鎮め祭れとの天照大御神の御神勅がありましたので、同三十九年に当地を大宮地と定め給いて大和国笠縫邑より遷御されたのであります。

当地で初めて宮殿を建立され大御神を奉斎されたのであります。此の時同時に豊受大神を合わせ祀られたのが当社の創始であります」とあります。

社伝由緒書が長文になるので、ここから先を少々要約しますと、こののち皇大神は現在の伊勢神宮の内宮の場所に御鎮座されますが、その時に豊受大神は、一緒に移動せず、「真名井ガ原」といわれていたこの地にとどまり、人民を守護していました。しかし、そのように守護をして 536 年後第二十一代雄略天皇二十二年に伊勢神宮の皇大神から天皇に神勅使が来られ「吾れ既に五十鈴川上に鎮まり居ると雖も一人にては楽しからず神饌をも安く聞食すこと能わずと宣して丹波の比沼の真名井に坐豊受大神を吾がもとに呼び寄せよ」[原文ママ]との御告を受けたのです。雄略天皇は、非常に畏れ多く、その御告を受け、伊勢国渡会山田原に外宮を建立され豊受大神を御遷座になったのです。

しかし、五百年を超えて豊受大神が鎮座され人民を守護しておられた場所をすぐに捨てることはできません。豊受大神の御神徳を得たい人は、この地に集まるようになり、伊勢から改めて豊受大神の御分霊を奉斎して、豊受大神が長らく親しんだ土地に「元伊勢外宮」を建立したのです。

元伊勢外宮は、京都福知山の船岡山と称する小高い丘の上にあります。しかし、個々の「船岡山」が古墳であるという説が多くあることでも有名で、もしも古墳であるとすると、この時代において最大級の古墳（全長 200 メートル以上）ということになります。神社や神話というだけではなく、古墳とか古代史といったところでも興味が尽きないのがこの「元伊勢外宮」なのです。

京都市内ではありませんが、伊勢神宮に行かないで、その「大元」を見てみたいと思う人、日本の成り立ちや神話に興味がある人、そして、そのようなことに興味を持ってもらうために、ぜひ留学生の皆様をご案内してはいかがでしょうか。

2. 丹波の国一宮出雲大神宮

「伊勢神宮」の元があれば、当然に国譲りの神話がある大国主命にまつわる「出雲大社」の系列があってもおかしくはありません。何しろ平安京は千年の都ですから、日本の成り立ちや日本と神々の関係があるところがあってもおかしくはないのです。その意味で「京都」で注目するのは「丹波国一の宮」とされる「出雲大神宮」ではないでしょうか。

この出雲大神宮は、古くから存在してしまして「徒然草」にその内容が書かれています。その部分を抜き出してみましよう。

丹波に出雲といふ所あり

丹波に出雲といふ所あり。大社を移して、めでたく造れり。しだのなにがしとかや、知る所なれば、秋のころ、聖海上人、そのほかも、人あまた誘ひて「いざたまへ、出雲拝みに。かいもちひ召させん。」とて、具しもていきたるに、おの

おの拝みて、ゆゆしく信おこしたり。

御前なる獅子・狛犬、背きて、後ろさまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子の立ちやう、いとめづらし。深き故あらん。」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝のことは御覧じとがめずや。むげなり。」と言へば、おのおの怪しみて、「まことに他に異なりけり。都のつとに語らん。」など言ふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官を呼びて、「この御社の獅子の立てられやう、定めてならひあることにはべらん。ちと承らばや。」と言はれければ、「そのことに候ふ。さがなきわらはべどもものつかまつりける、奇怪に候ふことなり。」とて、さし寄りて、据ゑ直して去にければ、上人の感涙いたづらになりけり。(徒然草236段)

私の現代語訳で申し訳ないが、かいつまんで要旨を書くと、

丹波に出雲というところがあったので上人などを誘ってみんなで参拝に行ったら、狛犬が反対側を向いていた。「なんと素晴らしい。この獅子・狛犬の立ちようは、大変不思議だ！この立派な神社の事だから、きっと深い意味でもあるのだろう」と上人が言って涙を流していたら神官が出てきて「子供のいたづらで怪しからん事です」という。上人の涙はいったい何だったのか、

というような内容です。

平安時代の昔から、かなり位の高い人も「由緒正しい神社」というように認識していたこと、また、この神社が行っていることは「何か意味があること」と思われ、普通と違って受け入れられてしまうような「権威」があったということが、この徒然草から分かりますね。

なお、鎌倉時代の末期に建て替えられていますので、今は、徒然草に書かれていた狛犬ではなくなっています。後ろを向いていたりはしないので

少々残念な感じが残ります。

この出雲大神宮は大国主命とその后神、三穗津姫命御二柱を祭神として祀っています。三穗津姫命は天祖高皇産霊神の娘神で、大国主命国譲りの砌（みぎり）、天祖の命により后神となられたとされています。日本書紀によれば、大国主が国譲りを決め、幽界に隠れた後、高皇産霊尊が大物主神（大国主の奇魂・和魂）に対し「もしお前が国津神を妻とするなら、まだお前は心を許していないのだらう。私の娘の三穗津姫を妻とし、八十万神を率いて永遠に皇孫のためにお護りせよ」と詔した、とされています。そのために奈良県磯城郡田原本町の村屋坐弥富都比売神社（むらやにますみふつひめじんじゃ）では大物主神とともに主祭神となっており、大物主神の後とされていることもなかなか興味深いところです。また、他の書籍によれば「恵比寿様」の義理の母に当たるとして島根県松江市の美保神社のご祭神にもなっています。一説には、卑弥呼の後を受けた壺与が日本書紀で三穗津姫と書かれているのではないかとされており、古代史の部分でもなかなか興味深いところでもあるのです。

また、古代史でなくても多くの皆さんに興味を持ってもらいたいのは、本来日本書紀のエピソードから「出雲大社が縁結びの神」とされていますが、実際に縁結びの力があるのは、三穗津姫と大国主命の双方が主祭神となっている「丹波出雲大神宮」のほうなのです、良縁を求められる方はぜひいかがでしょうか。

3. 吉田神社

京都の特集であるのに「京都市内が全くない」とおっしゃられる方。京都市しか新幹線も止まらないので元伊勢や出雲大神宮にはなかなか足を延ばすといつても大変とおっしゃられる方も少なくないのではないのでしょうか。しかし、「あ

りきたりな京都観光は嫌だ」という人、特に「せっかく日本で学んだので、故郷の人に、ちょっと日本を学んだということを示したい」というような留学生の皆さん。そのような方には、「吉田神社」がおすすめです。

吉田神社は、貞観元年（859年）、藤原山蔭が一門の氏神として奈良の春日大社四座の神を勧請したのに始まります。後に、平安京における藤原氏全体の氏神として崇敬を受けるようになりました。さて、Jalsaの会合にたまにきて挨拶をいただけます四條隆彦氏、その正式な肩書は「藤原朝臣四條山蔭嫡流四條司家第四十一代当代」となります。まさに、この吉田神社を作った「藤原山蔭」の子孫が、JaLSAの会合にご出席いただいていることになるのです。

この貞観のころ、京都は藤原氏ばかりでした。「藤原さん」といっても、全てが藤原さんですから、みんなで返事をしなければならないような状態です。そこで、藤原さんは役職や住んでいる場所で苗字を変えていったのです。藤原山蔭は、京都の四条大宮のところに屋敷があったことから「四條」を名乗るようになったのです。

藤原氏の先祖は、神話の中では天兒屋根命（あめのこやねのみこと）になっていますし、また春日大社の勧進でできた神社であることから、春日大社と同じ祭神になっています。武甕槌命（たけみかづちのみこと）・経津主命（ふつぬしのかみ）・天兒屋根命・比売神（ひめがみ）ですね。

この神社が、鎌倉時代には卜部氏（のちの吉田氏）が神官を相伝するようになり、そして、室町時代の末期に、吉田兼俱が吉田神道（唯一神道）を創始し、その拠点として明治時代まで神道界ではかなり権威があった神社だったのです。特に寛永5年（1665年）に、江戸幕府が発布した諸社禰宜神主法度により、吉田家は全国の神社の神職の任免権（神道裁許状）などを与えられました。このことによって江戸時代は幕府の制度化における神社の頂点にいたといっても過言

ではないのです。

では「吉田神道」とはどのようなものでしょうか。

この定義に関しては様々な解釈があるので、辞書からそのまま出してみましよう。日本大百科によると

吉田神道（よしだしんとう）

京都市左京区吉田(よしだ)神楽岡(かぐらおか)の吉田神社の神職吉田家で唱えた神道の一流派。元本宗源(げんぽんそうげん)神道、唯一宗源神道などと自称。また吉田の本姓卜部(うらべ)をもって卜部神道とも呼称する。中世初期の起源というが、実は室町末期に卜部(吉田)兼俱(かねとも)がほとんど一人で集成したとみられる。その所説は、万物はすべて神の顕現であり、人間も等しくその心に神を宿す。心はすなわち神である。この点で釈迦(しゃか)や孔子(こうし)も例外ではなく、彼らの説く教えも神道と密接な関係を有し、一樹に見立てれば神道は根、儒教は枝葉、仏教は花実に対応する(この説の原形は兼俱より1世紀前の天台学僧慈遍《じへん》の説にみえる)とする。これは三教根本枝葉花実説として近世に多く用いられた。一方、行法面では神道護摩(ごま)、三才九部妙壇十八神道、神道灌頂(かんじょう)、安鎮法等々を唱道し、神秘奥伝授受を行った。宣教運動も活発で吉田山に神道の総本山と称して大元宮を創建、朝廷や幕府に取り入り、従来の白川家をしのいで神職の任免権を得、全国的に多くの神社・神職をその勢力下に収めた。このように吉田神道は神道を日本の宗教の根本としながら、中世の儒教、仏教のほか、道教、陰陽道(おんみょうどう)などを自由に混用、そのうえに形成された独得の趣(おもむき)をもつ神道であり、きわめて作為的なものだが、他面その融合性に富むところが近世に広く長く浸透した理由とみられる。[小笠原春夫]

<以上抜粋>

このような教えから吉田兼見が吉田神社を大改装します。織田信長や明智光秀といった時の権力者と結びつき様々な建立を行っています。伊勢神宮や出雲大社のような古くからの神社と少し異なり、神社のつくりの中でも少々斬新さを感じ、ほかの神社と少し違う感じのする神社といった印象が強いのではないのでしょうか。

場所は京都大学のすぐ西側、昔の京都御所から見た「表鬼門」を守る形で、小さいながら山全体がパワースポットとなっている吉田山に作られており、中には重要文化財に指定されている「斎場所大元宮」をはじめ吉田兼俱を祀る神龍社、料理の神を祀る山蔭神社、お菓子の神を祀る兼祖神社など末社も多く、全国の式内神 3132 座を祭っています。

一時は、日本の神社の中心であった吉田神社、ぜひ一度行ってみたいはいかがでしょうか。